

50周年記念号刊行にあたって

小松 伸行

1973年2月23日、自分達の理想とする研究を追い求めようとした2名の若者が設立した株式会社日本海洋生物研究所は、2023年の今年、記念すべき50周年を迎えた。長きに渡り、多大なるご支援を賜ったお客さま、研究機関・教育機関の皆さま、そして、力を合わせて会社を育ててきた会長をはじめOB、現役の全ての社員とご家族の皆さまに深く感謝申し上げます。

弊社のこれまで50年の思い出は、本誌の冒頭で私の先輩各氏によって語られる。その中で、今の社員に改めて知って欲しいのは、「何にも束縛されず、自分達の好きなこと（研究）※ができる組織をつくる」という会社設立の動機であり、「大学や官立の研究所にも負けないような研究所」という理想である。いろいろ整った現代を生きる若手社員がこれを見て何を思うかは聞いていないのでわからない。時代が許した大口だと冷笑するのか、現実とは随分違うと口を尖らすのか。ただ、何を言おうとも、そうした動機で立ち上げられた会社が、70人程になる技術者を抱え、50年経った今もここに続いている。

採用面接に来た私に、当時の役員が「よければ読んでみて」と刷り上がった40周年記念号を手渡してくれた。そこに記された設立の動機と理想を読んだ時、自分の旗を振って歩く人生に少しの憧れを抱いていた私は、仲間と自由に好きな研究を追い求めていたら楽しかったらうなと想像してしまい、一味に加わることを決めた。そして何の因果か、この節目となる年に巻頭言を書いている。誰にも負けない研究ができる集団でありたいという理想を引き継いで掲げ、さらに50年後、100周年記念号で後輩に振り返ってもらえるまで活動が続くように、社員の成長を後押しする組織づくりに覚悟をもって力を尽くそうと思う。

弊社の年報は、1986年に初めて刊行されて以来37年間、2ヵ年（1992年、1998年）を除き毎年刊行してきた。第1号の巻頭言「刊行にあたって」には、「既成の方法だけにとらわれずに、精度の高い方法の開発、知見の蓄積を目指して、これから先も研究開発に力を注ぐ」、「問題の再認識、研究の方向性の追求、新しい手法の開発などを把握する上でぜひとも必要」などと、毎年年報を刊行する意義が説明されている。弊社がこれまで50年間存続できた理由として、また、これからの50年間も成長を続けるために、自主研究による研究開発・技術開発は絶対に欠かせない要素である。社員自身が現在の調査・分析方法や報告の中に問題点と解決すべき課題を発見し、解決策を探索する力を身に付けるために、加えて、得られたデータから有益な情報を見出し、自身の考えを正確に顧客に伝える技術を向上させるために、4月に開催している技術検討会とともに、自主研究を試行して発表する場となる年報が果たす役割は非常に大きい。

本誌でも、若手社員を中心とする社員有志が、ただでさえ忙しい日々の業務の中から時間を捻り出し、各人なりの研究活動に取り組んだ成果が掲載されている。勉強が足りないのか、先輩・上司の指導が悪いのか、データや考察が不十分と感じさせる報文があるかもしれない。それでも、原稿掲載に挑んだ社員と関わった仲間たちが、確実に一足分、成長の歩みを進めた証であり、頼もしく、将来が楽しみだと思える。皆さまには是非ご一読いただき、機会があれば率直なご意見・ご批判をお聞かせいただくと幸いです。

最後に、株式会社日本海洋生物研究所は、50周年を機に社員一同気持ちを新たに、生態系がもたらす公益的な機能の維持、発展に貢献するため、日々の業務と研究活動に全力で取り組む所存である。今後とも変わらぬご支援をお願い申し上げます。

※大屋さんは常に「好きなこと（研究?）」と「?」を付していますが、私は「(研究)」だと解釈しています。